



いれずみ物語

— 15 —

小野友道

女のいれずみ

— 刺青に通ふ女や花ぐもり —

表題は日野草城の句である。下駄で足早に彫師のところへ今日も女は通っていく。男のために彫るいれずみか。2カ月前、あんなに痛くて悲鳴を上げていたのが、今はもう、その痛さが待ち遠しい。チクリチクリと浮かび上がってくるのは、牡丹か、羽衣か、はたまた昇り竜か。それとも女郎蜘蛛なのか。色が増えるにつれ、だんだんと彫り物が皮膚の中で自意識をもつてうごめくのを、女はその背中に確かに感じている。皮膚が針を待っている。さあ急がないと。女は午後の花曇りの中、人目を避けるように日傘を斜めに通り過ぎていった。そんなイメージを私は、この句に持った。白い肌に青いれずみ、それだけでも何とも妖しい。

*

どこか妖艶さが漂う女の彫り物、まずは谷崎潤一郎の女郎蜘蛛が蟠った白い背中に代表されよう。一方で、毒婦高橋お傳のいれずみも、小村雪岱の浮世絵であまりにも有名である。毒婦と呼ばれたお傳は、一体どんな彫り物をしていたのか。まずは仮名垣魯文の『高橋阿傳夜叉譚』を読んでみなくてはなるまい。

事件直後にいち早く書かれたこの小説に、驚くなかれ、最後までどこにもお傳のいれずみは出てこない。高橋お傳は明治9年8月26日後藤

吉蔵殺害で捕まり、同12年1月31日東京裁判所にて斬罪を申し渡されている。お傳の母親おはるは、高橋勘左衛門と結婚した。しかし、すでに鬼清とあだ名される男とできていて、身ごもったまま結婚したのである。そうして生まれたのがお傳である。おはるはまもなく悪腫に梅毒を併発して死んでしまう。継母が来て、養女にやられたお傳は、「その容貌は玉を欺き露の滴たる天姿をそなへ高貴に恥じぬ粧ひあれど其性実母のおはるに似たるハかの悪漢清吉の質をうけしかあら〜しく」と、極め付きのいい女だが、博打が好きで、その美貌と色で男を惑わし、金を盗み、らいに苦しむ夫波之助をも、ついには殺してしまう。まさに毒婦である。しかし、毒婦の皮膚に彫り物の話は、仮名垣魯文の小説にはない。魯文は「本編は略その實に近きを探り條々聊か文飾して…」と書き記しているのも、もし彫り物があれば、まずこれに触れぬことはないはずである。小説の末尾に「一月三十一日…刀下に首を失ひしと斯る大胆なる女なればその亡骸を浅草なる警視第五病院に差送られ本年二月より四日間細密に解剖検査されしに」とあるが、やはり彫り物の記載は見あたらない。しかし、この小説にもいれずみは確かに出てくる。お傳を脅し、金を巻き上げようと



読売新聞（昭和10年）に掲載された邦枝完二著『お傳地獄』の小村雪岱の挿絵
（『小村雪岱画譜』龍星閣、昭和31年より）

した遊び人児雷也が、お傳の啖呵にたじたじ、「児雷也も腕に黥刺し巴蛇の舌を巻いて立去り」とある。後にも先にもいれずみの記載はこれだけである。

玉林晴朗も「毒婦お傳の死骸は解剖になり文身のある皮は剥がされて今も東京帝大に保存されて居て屢々其のお傳の皮は展観されるが、其の皮がお傳のものかどうかは帝大のほうでも確実ではない。全くそれは怪しいものであってお傳の解剖になった事は事実であるが当時の新聞などを見てもお傳に文身があった事は少しも記してない」と述べている。

ちなみに明治政府は、この時代、近代国家としての対面を保つために、明治5年に定めた違式註違条例によりいれずみを禁止していた。この条例は全部で54条、その11条に「身体ニ刺繡ヲ為セシ者」とあり、いれずみを「刺繡」と記している。

下って昭和10年、読売新聞に連載された邦枝完二の『お傳地獄』がある。これは昭和21年に北光書房から単行本も上梓されている。この小説のお傳は背中にいれずみがある。小説の筋は仮名垣のそれとかなり異なるが、「高橋の御

新造なんぞも、ざらに見られる女ぢゃねえぜ。小股は切れ上がってるし、眼は涼しいし、色は抜ける程白いし、どこといって非のうちどころのねえ別嬪だ」と、凄くいい女であることは仮名垣のお傳と同じである。櫓の次郎という彫師の「わずかに六畳の、それも壁にひゞのある長屋健」で、「眉間に美しい八の字を寄せて、ぢつと辛抱枕にかじり付いているお傳と、ほかし針に墨を含ませて、背中に當てた太い手の指の間から、頻りに御殿女中の衣装の模様を彫り続けている櫓の次郎とは、一人は針の先に、一人はほんのくぼに、全神経を集め盡くしたもの、如く、燭の光さへさゆるぎもせぬまでの静寂の裡に互ひが木像のやうに固くなり切つていた」

お傳は、しかし、この「桜花をあしらった御殿女中の半身像」のいれずみをあらわに曝して罪を重ねたという小説ではない。あくまでその美しい妖艶さを毘に悪事を重ねた格好である。しかし、仮名垣のお傳とは趣が異なり、その結末も寂しく、掏摸で元旗本の若様の市十郎と、捕まるのを覚悟の上で江戸へ向かって、聊かの後悔とともに重い草鞋を履いたところで小説は終わっている。邦枝完二の読売新聞に連載された

『お傳地獄』の挿絵を小村雪岱が担当した。挿絵のお傳の背中には、見事な桜の刺青が描かれている。このお傳のいれずみが、お傳のイメージを固定した感がある。それほど小村雪岱の絵は魅力的なのである。

*

玉林は「女の文身にもなか〜凄いのがある」と、「河童のお角」「紋ぢらしのお玉」「金太郎のお竹」「鱗お山」などを挙げ、「河童のお角」については、河童が陰門を指差しているいれずみを入れ、それをわざと見せて、笑った者からゆすりを働いたという『守貞漫稿』の話を紹介している。「文政頃江戸に於角と云女のいすりを業とする悪女あり、全身種々を彫り、又河童玉門に指さす形ほりて、大丸屋で美服を誂へ製成に至て店前にて裸體と成て、新衣に更る衆人見之て笑ふより、金をいすりしことあり、彼ほり物は元よりありし也、見之て笑わんことを察して、謀りし也」というものである。さらに明治維新前後の女として、「人穴お糸」「雷お新」「生首お源」などととも、前述したように「高橋お傳」についても述べている。その他にも多くの女のいれずみを挙げ、さらに「文身師の女房と云へば先づ、文身があるものと相場がきまって居る位である」との指摘もしている。

『幕末明治女百話』の中に、「妾の刺青のお話は、お恥ずかしいんですが、牛込神楽坂にいた、初代彫字之さんに彫ってもらいましたんです。…神楽坂の宅は娘さんが、表向き仕立屋をやっていて、その二階が仕事場で、丁度芸妓屋の巷でしたから、女ながら出入りに工合がよくって万事都合よく参りました。妾の刺青ですか、背中は『近江のお兼』です。腕は、右は『山姥』に左が『金太郎』なんです。この刺青は今だって廃れはしません。現に二代目の宇之さんがいますし、おかみさんが三十四、五ですが背中は『観音さま』で、『登り竜降り竜』と、『風の神』を左右の腕に彫っていただきます…」とあり、女のいれずみがこの時代にも見られることを示している。明治23年3月1日の読売新聞にも「文身流行の事は昨日紙上に記せしが、

目下女にて文身あるものあり。すなわち深川に高名なる割烹店の老母と、本所に立派なる華族の抱車夫某の女房なり。しかして老母は元侠客の妻なる頃に文身し、女房は赤坂に校書(芸妓)たりし頃文身せりと。もつとも堂々たる官吏、歴々たる紳士中にも、くりから紋々のお方々ありと云えば、これらは敢えて怪しむに足らざるべし」とあり、明治時代もいれずみは、かくれて人気があったようである。

*

ところで、お傳に殺された吉蔵、その吉蔵と同じ名前の方が、昭和11年、阿部定に首を絞められた。東京朝日新聞の、その事件の見出し「旧主人の惨殺死体に血字を切刻んで美人女中姿を消す」とある。この美人女中阿部定の皮膚にもいれずみは見当たらないが、愛人吉蔵を縊死させたあと、その皮膚にいれずみをした。昭和11年12月21日の判決は「主文 被告人懲役六年に処す…理由…同人をして死に至らしめたる上、数時右吉蔵の死体に痴戯し居たるが、同日午前五、六時頃更に同人の死体をも独占せんとし、その情痴の表徴たる局部を切り取り、且自己の名を刻まんとし、予め痴戯の為購置きたる肉包丁(前同押号の十九)を取り出し、之を使用して、右吉蔵の陰茎及び陰囊を、順次切り取り、次で同人の左上膊前側上部に被告人の名「定」の字を刻み込み以て吉蔵の死体を損壊し、尚右独占の事実を他人に誇示せんが為、右局部等の流血を以て吉蔵の左大腿部に「定吉二人」なる文字を、その寝床敷布に「定吉二人きり」なる文字を夫々書き残し…」とある。定のこの行為を「心中立て」とみなす説もあり、自分のためだけの吉蔵の腕や大腿に刻んだ文字は、確かにいれずみにほかならない。

(熊本保健科学大学・学長)

主要文献

- 1) 仮名垣魯文：『高橋阿傳夜叉譚』、『明治開化文学全集(二)』、筑摩書房、1967。
- 2) 邦枝完二：『お傳地獄』、北光書房、1946。
- 3) 小村雪岱：『小村雪岱画譜』、龍星閣、1956。
- 4) 篠田鈺造：『幕末明治女百話(上)』、岩波書店、1997。
- 5) 藤沢周：『刺青』河出書房新社、1999。
- 6) 玉林晴朗：『文身百姿』、文川堂書房、1936。
- 7) 前坂俊之編：『阿部定手記』、中公文庫、1998。